

おさかな瓦版 No.25 ナルトビエイ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水産総合研究センター メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2000261

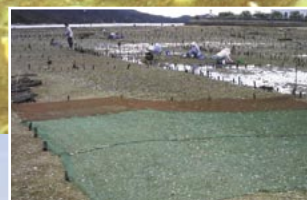
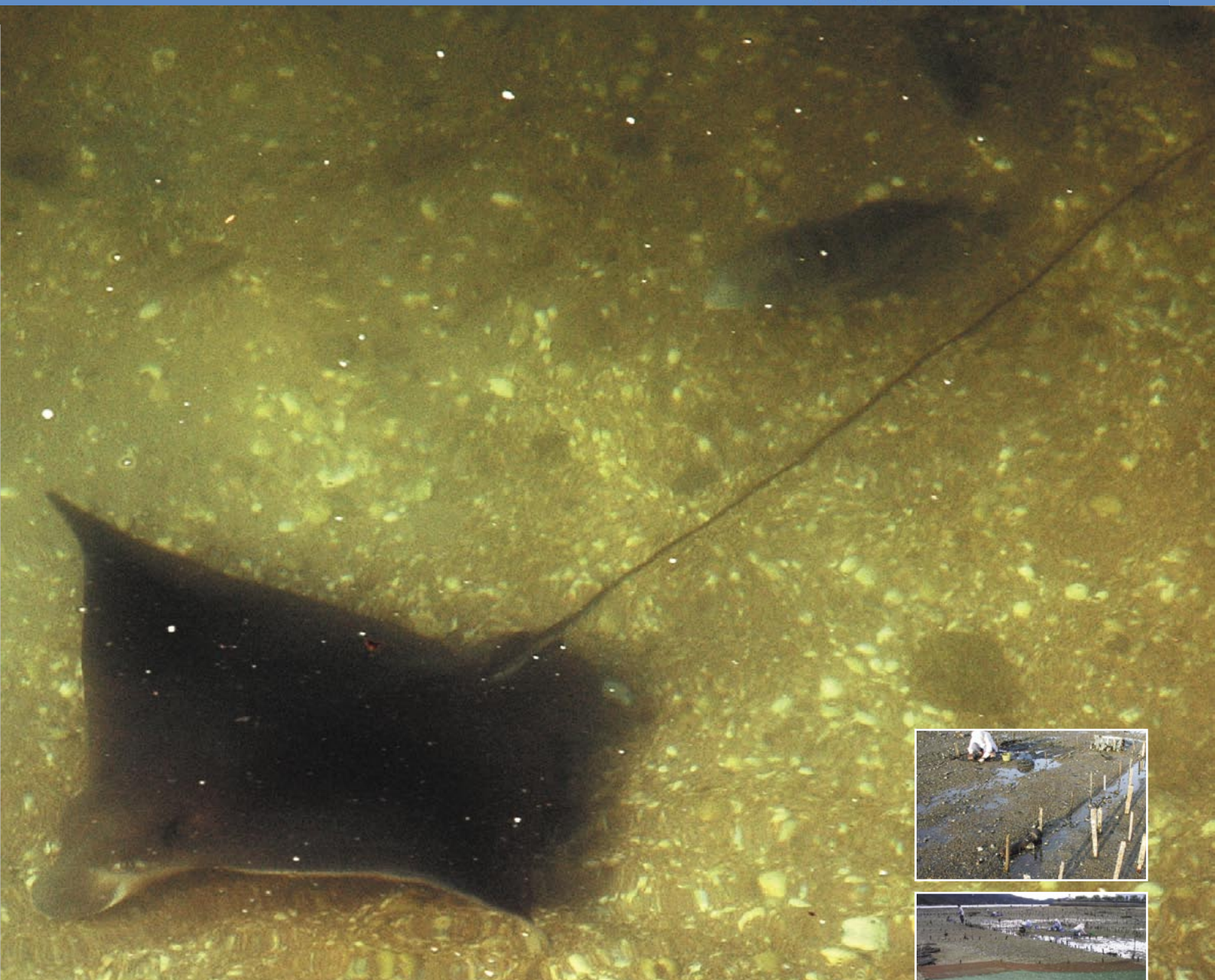


独立行政法人
水産総合研究センター

NEWS LETTER

おさかな瓦版

No.25
2008.10



シリーズ：瀬戸内海のさかなたち

第5回「ナルトビエイ」

書籍で知る日本の水産

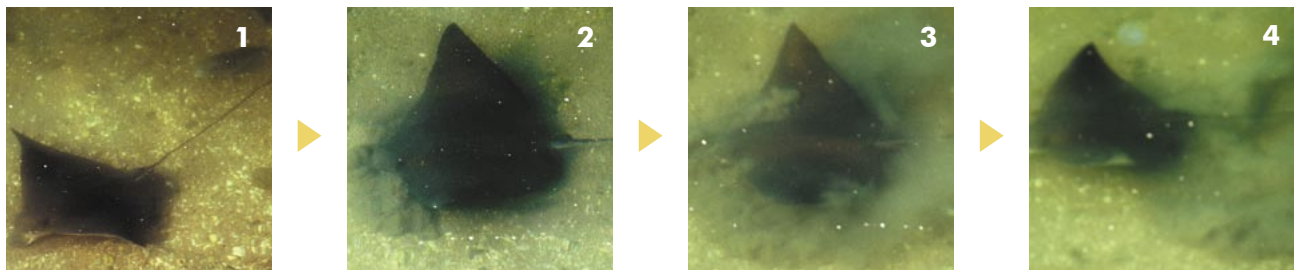
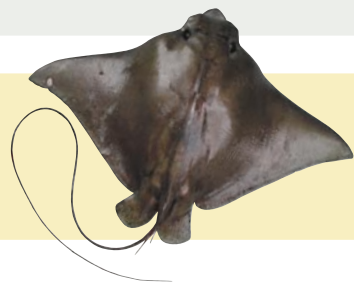
ほしかどいやひとりあんない
『干鰯問屋 獨案内』-江戸の買物ガイドブック

アユの遡上量が予測可能に

あんじいの
「おさかなクイズ」



ナルトビエイ



アサリ漁場で穴掘り採食中のナルトビエイ（瀬戸内海・広島湾）1～4は連続写真 体盤幅（体の横幅）88cm

ナルトビエイは、1989年に和名が付けられた温帯・暖海性のトビエイ科魚類です。長崎県五島灘・和歌山県以南～西部太平洋、インド洋、紅海に分布しています。瀬戸内海では、1994～1996年の採集標本に基づき、1997年に初めて生息が報告されました。温暖化にともない、瀬戸内海や有明海に大量に出現したとされます。巨大で特徴的な風貌から、最近ではアサリなど二枚貝の大敵として、すっかり有名になりました。

本種は、水温が上昇する5月から瀬戸内海に出現し、夏季に河口干潟域で出産した後、水温が低下する12月には姿を消すことか

ら、冬季は外海へ移動すると考えられています。成長は遅く、生まれたときの体盤幅は30cm、5年で80cm、9年で100cm、雌では最大で150cm、体重50kgになります。

瀬戸内海では、2001年8月に広島湾で本種によるアサリ等二枚貝への食害が初めて問題となりました。翌2002年には周防灘で深刻な問題となり、2004年から大分県が、2005年から山口県、2007年には福岡県も加わり、本格的な駆除を実施しています。2007年の駆除量は、周防灘全体で231トン以上にも及んでいます。水産庁では本種を「漁業

有害生物」に選定しています。水産総合研究センターでは、アサリ資源の回復のために様々な研究を行っており、筆者は、魚類と干潟のアサリとの相互関係を調べています。瀬戸内海での本種による食害は、アサリ資源が枯渇状態に陥った数年後に発生しているため（図1）、アサリ資源の激減には関与していないと考えられます。しかし現在では、周防灘のアサリ資源の再生を妨げる一因となりうる存在です。駆除の他、アサリ漁場に杭を打ったり、網を張って保護するなど、様々な食害対策が試みられています（図2）。

（瀬戸内海区水産研究所 重田 利拓）

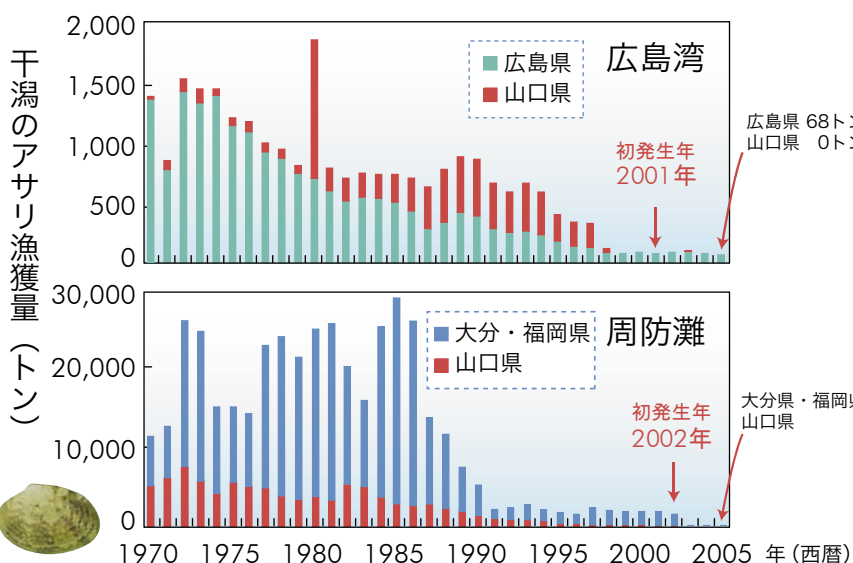


図1. 干潟のアサリ漁獲量の長期変動とナルトビエイ食害の初発生年
瀬戸内海のアサリ漁獲量は、1985年のピーク時（45,023トン）から2005年には115分の1（393トン）にまで激減



図2. 食害対策（広島湾アサリ漁場）
図上：打杭 図下：被覆網

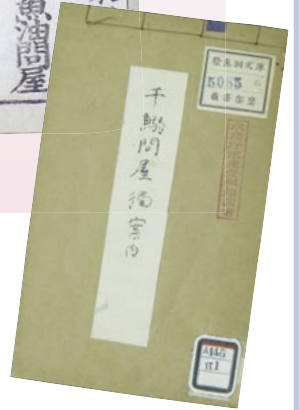
シリーズ第11回「書籍で知る日本の水産」

ほしかどいやひとりあんない
『干鰯問屋 獨案内』—江戸の買物ガイドブック

(中川芳山堂版 文政7年(1824) 11.6 × 19cm 3丁 / 『江戸買物獨案内』より)



ほしかどいやひとりあんない
干鰯問屋 獨案内



本書は、文政7年(1824年)に大坂の中川芳山堂が出版した江戸全域にわたる買物案内書『江戸買物獨案内』の中から、「干鰯魚粕魚油問屋」が掲載されている27～29丁*だけを抜き取って、綴じ直されていたものです。

なぜ綴じ直されていたかという、持ち歩くためだったと考えられます。『江戸買物獨案内』は、広大な江戸の町で目当ての品を扱う商家の所在地を手際よく探せる

ように工夫して編集されていましたが、掲載した商家の数が膨大で、上・下・飲食之部の3冊を併せて2,600以上もの商家が掲載され、500丁以上の厚さがありました。上巻の冒頭には大田南畝による序文や、葛飾北斎による2枚の江戸景観図もありました。江戸の繁栄振りが伺え、また綴じ直しからは当時の実用のようなことができます。

ところで、干鰯魚粕魚油問屋とは何を売っていたのでしょうか。今では鰯は身近でおいしい魚のひとつですが、江戸時代には干鰯や魚粕に加工して農作物の肥料(魚肥)として利用されていました。干鰯は生鰯を砂浜で天日干しし

たもの、魚粕は生鰯を釜で煮て魚油を絞ったあとに天日干したものでした。副産物として生産された魚油は灯油などとして利用されたようです。

江戸の干鰯問屋に入荷する鰯は、主に九十九里浜から房総半島にかけての漁場で地曳き網や八手網などの漁法で捕っていました。上方の綿花などの商品作物の肥料にするために上方の漁師が九十九里浜沖で鰯漁をするようになったのが始まりで、文政期には江戸や浦賀の干鰯問屋を通して、上方以外にも関東や東海地方へ販路を広げていたようです。

(文：鈴木 信子 写真：大野 あゆみ 中央水産研究所)



地引網の使用を終わり漁獲物取揚の図
(出典：日本水産捕採誌)

*丁：綴じた紙の枚数の単位。1丁は紙1枚。



あんじいのおさかなクイズ
実在する魚はどれ？

1. ヤマドリ
2. キジ
3. ライチョウ



TOPIC

アユの遡上量が予測可能に

アユは川で生まれ、すぐに海に下って稚魚期を過ごし、5 cm ほどになると再び川に遡上します。その遡上量は年により大きく変動するため、川のアユの量も変動し、漁業や観光など地域の産業に大きな影響を与えることがあります。

そこで水産総合研究センターは、山形県内水面水産試験場と共同で北部日本海に注ぐ鼠ヶ関川で

アユの調査を行い、遡上量変動の原因を探りました。

2000年～2007年の調査で、卵から生まれる仔魚の数、川に定着する若魚の数および親魚の数は最小の年と最大の年で8～9倍、海から遡上する稚魚の数は21倍も変動することがわかりました。しかし産卵数は、アユが減ると親が大型化してたくさんの卵を産



図2. 遡上期のアユ(全長5～7cm)

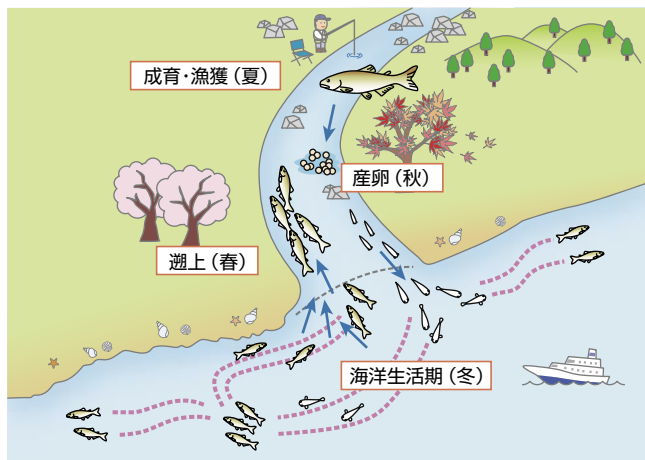


図1. アユの生活史

むため5倍の変動に留まりました。また、海で生活する期間の生き残りが、他の時期に比べて非常に低いこともわかりました。

そこで沿岸

の環境と遡上量の関連を調べた結果、10月の沿岸水温が高いほどアユの生き残りが良好なことがわかり、水温から遡上量を予測することが可能となりました。アユは天然魚の遡上量を補うために放流が行われていますが、この予測値を目安として、放流する場所や尾数を調整するなど、より効率的な増殖対策が実施され始めています。

(業務企画部 内田 和男)

**A あんじいの
おさかなクイズ**



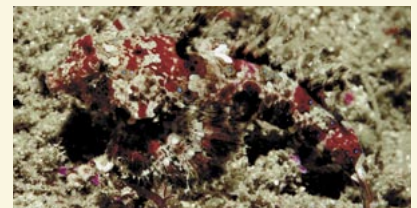
**答え
ヤマドリ**

ヤマドリはスズキ目ネズッポ科に属するさかなで、日本では北海道から九州までの各地の沿岸に棲んでいます。浅い海の岩礁に近い砂地を好み、砂の中にいる貝やゴカイ類などの小動物を食べます。ヤマドリは、一般にメゴチと呼ばれるネズミゴチの仲間ではよく

似ていますが、体色が灰色～茶褐色で地味なネズミゴチと違い、赤や白、青などの色が入り交じってとてもきれいな魚です。この派手な体色が、鳥のヤマドリを連想させることが名前の由来かもしれません。

ネズッポ科の魚は雄が雌に求愛行動をすることが知られていますが、ヤマドリも例外ではなく、雄はその黄色い大きな背びれを広げたり閉じたりして雌にアピールします。体長は大きくても10cm

ほどで数も少ないため漁獲の対象にはなりません。綺麗な体色と求愛行動で22号で紹介したハチなどと同じようにダイバーに人気があるさかなです。時には素潜りでも見られるような浅場に来ることもあるので、海水浴に行った時などには探してみたいかが？



おさかな瓦版 No.25 (平成20年10月発行)

編集：独立行政法人 水産総合研究センター 広報室 発行：独立行政法人 水産総合研究センター
〒220-6115 神奈川県横浜市西区みなとみらい2-3-3 クイーンズタワーB15階
TEL. 045-227-2600 FAX. 045-227-2700 ホームページ <http://www.fra.affrc.go.jp>



表紙：餌の貝類を探すナルトビエイ(広島湾アサリ漁場)

後ろでは、大きなクロダイも餌を探している。